二〇二四年度　進学説明会　総合型入試体験談

岡本かの子と小野小町を追って

～合格者〇さんによる「小町の芍薬」のアダプテーション～

〇さんの創作ポイント

君助は芍薬の園で出会った少女に恋をし、さらに少女には亡き妻の魂が憑依してもいたため、二人の女性に恋をしていたと考えた！

・十年後に少女と再会して…

→君助は少女を見て背筋に寒気がした。少女の姿は十年前と何も変わっていないのだ。

・少女と初めて出会った日を思い出して今…

→その日少女が接吻をしていた芍薬は桃色だった。桃色の芍薬は美しい少女にはお似合いの花だった。しかし、今少女が手にしているのは紫色の芍薬だ。

・小野小町の呪いは…

→「多分、小野小町は死ぬよりも辛い、生の呪いをかけたのだわ。死ねるかもわからないの。」

・少女との再会時に君介は…

→君介は女というのはやはり、男よりも一枚二枚上手だと冷静に感じた。

・もう一度、少女と再会した時…

→采女子はその大量の古本を収集している君助を見ると「また、そんな風にものを集めていらっしゃって」〈中略〉何故か、そのやりとりに覚えがあった気がしたが、

→采女子は嬉しそうな顔をして〈中略〉「瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ」と詠んでみせた。

→「君助さん。私が上の句を言いますから、下の句をお詠みになって」と。〈中略〉「花の色はうつりにけりないたづらに」と少女は言った。君助はそれに答えるように「わが身世にふるながめせしまに」と返した。

→少女采女子は息絶えてしまった。君助は今出来る最大限の埋葬を施し芍薬の花を百本持たせ…

・亡き妻が采女子に憑依していることがわかった日記を読んで

→少女は「わたくし」という時と「あたくし」という時と何故か二種類の主語を用いるのだ。

・最後に亡き妻が現れて
→「君助さん。貴方の子供は芍薬の花が一番好きだったのよ」〈中略〉そして君助もまた息絶えてしまった。